

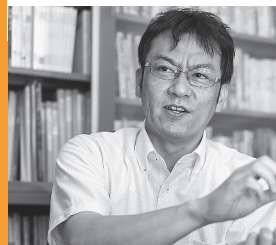


従来の論評を覆した点が評価され、学会賞を受賞

専門である社会学は、社会がどんなふう形づくられどう動いていくのか、そこに個人はどう関係しているのかを研究する学問です。なかでも、「社会の見方」を研究する「社会学理論」、社会学の歴史を探る「社会学史」をテーマに、政治学の分野にまたがって研究しています。

大学生の頃から、アメリカ合衆国の社会学者ダニエル・ベルを研究してきました。1980～90年代のアメリカでは、福祉削減などを掲げ自由競争による経済の発展を目指した「新自由主義」が唱えられ、ベルもその思想を支持する一人と捉えられていましたが、資料を読み進めるうちに、実は逆の立場だと気がきました。彼の本来の社会保障を重視する思想を研究することで、「平等な社会」ができるまでの道筋が明らかになるのではと考え、本人へのインタビューも含めて論文にまとめ2011年に『公共知識人 ダニエル・ベルー新保守主義とアメリカ社会学』を出版。翌年、所属する社会学史学会で学会賞を受賞しました。

60～90年代のアメリカの社会学者の思想を切り口に「社会の見方」を研究



異なる領域の「知」を融合させ新しいものを生む、という考え方

ベルのように、20世紀初めのニューヨークに生まれ、アメリカ文化の核となったユダヤ系の学者、作家などの知識人集団を「ニューヨーク知識人」といいます。5年ほど前からは、この集団の社会学者を中心とした4～5人の思想を研究し、論文を執筆しています。

この集団には歴史家や経済学者などさまざまな領域の人たちがいました。学問が細分化された現代では、領域の異なる研究者同士が互いの知識・研究を理解し合うことは難しいのですが、彼らの考え方は、交流しながら異なる領域の「知」を融合させ新しいものを生み出す、というものです。その点に注目しながら研究したいですね。また、「理論と実践の場とを行き来しながら考える」という研究方法にも取り組んでみたいのです。

文学部 社会文化学科
教授

しみず しんさく
清水 晋作

福岡県出身。法学部の大学生時、ゼミの指導教授がアメリカの社会学者タルコット・パーソンズを研究していたことから政治社会学に興味を持ち、以後、研究を続ける。2020年より盛岡大学文学部教授。

Episode

小岩井農場、遠野…、ゼミの学外授業で各地へ。

私のゼミ「社会学演習Ⅰ・Ⅱ」では、「地域社会」や「環境問題」をテーマに、年1回学外授業を行なっています。これまで印象深い授業の一つが「小岩井農場」で実施したものです。小岩井農場は自然と触れあうことができる観光スポットとして知られていますが、実は、再生エネルギーの

利用など環境と共生しながら、畜産業や林業、観光業に取り組みながら地域活性化の一役を担っている企業。その事実を知った学生たちからは大きな反響がありました。

他にも、遠野ふるさと村、くずまき高原牧場、盛岡手づくり村など、毎年異なる場所を選んで出かけています。

